

愛はあるか

和田正彦

おまえたち心の元に、愛はあるか。

おまえたちが欲する全ての欲求の源にあるは、愛をおいて他にない。

夢を持つこと、金持ちになること、有名になること、いや、生きること全ての欲求の実態は愛である。

愛がほしいと願うものよ、おまえに相手を理解する心があるか。

相手を、そして世を理解することは愛の基本である。

まず相手を理解すること、自分から世を愛することである。

理解することは、受け入れることを意味し、受け入れること以上に強い力はない。

その反対は、愛を欲するがゆえに自己中心となり、相手を理解せぬこと。

相手を理解せぬ心は憎しみと怒りを産み、破壊と争いをもたらす結果となる。

個人においても、国においても然り、いつの日もその乾いた心を潤すことはない。

相手を理解せよ。

その心はおまえたちの心を満たし、他の心も満たす。

幸福へのスパイラルは成功に向けて回り始めるであろう。

またまた強烈なるメッセージを見つけ出してしまった。私はこのメッセージを見て以来、自分や周りの人達の言動が、いつも気になってしまう。このメッセージは、「愛とはなんぞや？」という私自身の問いに、かなりいい線で答えているような気がするの

だ。
特に「相手を、そして世を理解することは愛の基本である。」というところがズシンと来る。

誰しも自分の周りには、多くの人がいて、理解できる人もいるし、理解し難い人もいるのではないだろうか。しかしながら、このメッセージは「相手を理解せよ」と言っている。私は比較的人間の好き嫌いはない方だが、それでも時々、「理解できない」ような言動の人がいる。そして、このメッセージを思い出す。

そして「理解できない」というより「理解したくない」と思っている自分を発見する。しかもいろいろな理由をつけて、「理解したくない気持ち」を正当化してしまう。まさしく人間とは、本来エゴイズムの塊であるということを自ら実感するのだ。エゴイズムとは、通常利己主義とされており、その反対語は、他人を利する利他主義と

対極にあるということになる。

一般的な意味でこのエゴイズムは「自分のことだけ考える」という意味においては、「人道的には悪いこと」ということにもなる。

しかしながら、エゴイズムも、その捉え方によつては、すべて悪いということではないとも言える。

自分が楽しくありたい、自分は幸せでありたいと考えるのは、決して悪いことではないし、人間の本来の願望であると思う。

自分は不幸でもいいから、他者を幸せにするというのは、私には偽善者的発想にしか聞こえてこない。

私は幸せな自分が、他者を幸せにできると思っている。もちろん何を幸せ、何を不幸と呼ぶかによるが、自分が苦しみ悲しみ、落ち込んだ状態では、とても他者のために価値ある創造などできないはずだ。

自分の状況が周りから見ても、決して「幸せ

な状況」じゃなくても、本人が幸せだと思えば幸せは成立する。

体が不自由なことが不幸とは言えないし、貧乏が不幸とも言えない。逆に健康な体を持ち、お金をたくさん持つていても不幸な人は不幸だ。自分が幸せか不幸かは、自分の価値観の中で、自分の現状をどう捉えるかの違いだ。

自分だけの楽しみ、自分だけの欲求の充足、自分だけの利益の享受を得て、本当に人は幸せになれるのだろうか。

そこには、他者を犠牲にしたり、他者を排除して自分の利益を獲得するという意思が存在する。

他者を犠牲にしたり、排除したりする人が世間で受け入れられるかと言えば、先ずそれはあり得ないことだろう。嫌われ、避けられ、非難され、挙句の果ては、処罰されることもある。

そのような最終結果が自分に訪れること

を想像するより、今現在の自分の欲や利益を優先させる人たちが、場当たり的な自分都合の行動をとってしまうのだろう。

今の生き方によって、将来が決まってしまう。今を懸命に生きる人と、今をごまかしながら生きる人の将来は全く違う。

「今を懸命に生きる」とは、将来を考えて生きるということではなく、「今を受け入れる」ということだ。将来は、今やっていることとの結果が現れる時であり、今から意図的に将来を作り上げることはできないのではないか。

人生は、自分の思い通りのシナリオで展開するとは限らない。たとえ今、自分の計画と違う、予想だにしないことが起きても、その現実には、しっかりと向き合い、今の中でやるべきことを見出し、それらのことを着実に実行していくことが賢明だと思う。

場当たり的な自分都合の行動とは、それとは全く逆のことだ。今を受け入れず、自分

の周りを非難し、今は出来ないことをやりたがり、今できることをやらないことだ。

「愛はあるか」というこのメッセージは、まさにこのことを言っているのではないか？ 「相手を、そして世を理解する」ということは、今を受け入れ、そして今の状況に對し、懸命に對應するということだと解釈する。

「愛を欲するが故に自己中心的になる」とは、まさに自分からは何もしないで、与えられるのを待っていることだ。愛されること为目的であり、自分の方から相手を理解し、愛することをしないことだ。

理解することより、理解されることばかり考え、理解されないと相手や周りを非難する。愛することより、愛されることのほうが大事で、愛されないと相手を攻撃する。

そうなると、自分の中には、憎しみや妬み、怒りが生まれる。そして、それらの感情を自

ら避けようとすれば、最も「愛の対極」と言われる「無関心」に陥ってしまう。

「そこに愛はあるか」という問いは、私は四六時中付きまとう。

何気ない人との会話の中にも、多くの人を相手に意見を発表する時も、人に何かものを頼む時も、頼まれる時も、花を飾る時も、掃除をする時も、経営戦略や会社の様々な方針を決める時も、怒る時でさえ・・・

その行動には「愛があるか」と問い直すようになってしまった。

一つ一つの言動に、愛が足りないとどうなるか？

納得を得られず不満が生まれる、信頼が無くなり不信感が生まれる、喜びが無くなり悲しみが生まれる、期待する結果がでない、売上も上がらない・・・

このようなマイナスな状況はすべて、自分

の一つ一つの行動の中に、愛が足りないだけのことではないかとも考える。

もし、今の状況が自分にとって、納得のいく状況でない場合、これまでの過程の中で、自分の思考や行動に愛があつたかどうかを考えてみると良いのではないだろうか？

そして、現在もどのような思いで仕事をし、人と接しているかを逐一問いただしてみてもはどうだろうか？

適当な仕事をしようとしている時、いい加減な受け答えをしている時、愚痴を言っている時、きついなと思っている時・・・間違ひなく「愛が足りない」自分を感じるのだ。

昨夜は、ホテルはたくさんのお宴があり、十時近くまで現場は忙しかった。その後、翌日の披露宴の準備設営を行い、私も遅くまで設営のチェックを行った。

事務所に戻ったのが午前一時で、それからさらに残務整理を行ったので、二時頃まで仕

事をして、最後は女性スタッフと一緒にタクシーで帰った。

以前の自分であれば、ため息混じりに「疲れた」とか、段取りの悪さを指摘して「参つたな」とかの言葉が出ていたと思うが、昨夜はそんな言葉が全く出なかった。そして、家に帰って一人になった時も、「疲れた」という気持ちにはならなかった。もちろん体は疲れているのだけれど、気持は疲れていなかった。今やるべきことに集中できて、非常に気持ちも落ち着いていたのだ。

一時的なことかもしれないが、少しわかったような気がした。

要するに余計なことを言わなければいいのだ。ただそれだけで、気持が変わってくる。

「現実を受け入れる。人を受け入れる」とは、とりあえず、余計なことを言わないことから始まるのかもしれない。

今年の最後に、来年のテーマが見つかったようだ。